

近世後期肥後国天草郡における庄屋をめぐる 書籍の貸借と学問・行政

東 昇

はじめに

本稿は、近世後期、一八〇〇～一八二〇年における、肥後国天草郡高浜村の庄屋上田宜珍をめぐる書籍の貸借と、その背景である学問(国学・和歌)と行政の関係について考察する。これまで村の行政における日記に蓄積された地域情報の内容から、機能別に記録、選別、伝達、活用、継承に関して、高浜村の痲瘡や庭師の事例、船頭からの情報収集等を取りあげてきた^①。また書籍については、庄屋による地域情報の集成として宜珍が編集した「天草備考」等の活用、知識の交流の実態を「練兵日記」の写本を素材に、書籍を中心とする人のつながりに焦点をあてて分析した^②。

上田宜珍の学問・文芸に関しては、すでに角田政治の『上田宜珍伝 附上田家代々の略記』(以下、『上田宜珍伝』と略す)によって、詳しく紹介されている^③。二編第二章「宜珍翁の学問」に、宜珍と関わりが深い本居大平、長瀬真幸、渋江松石(宇内)、三枝良古、高本紫溟、三編第二章「宜珍翁と天草の文教」に大平の天草の門人、附録「島乃藻屑」(宜珍の和歌集)と、多くの頁をあてている。本稿でも、角

田の成果に依るところが大きい。また本居宣長と肥後の関係については、上妻博之が熊本藩士長瀬真幸を中心に門人との関係をまとめている^④。しかしいずれも学問の研究としては一定の成果であるが、それが庄屋宜珍とどのように関連するのかが、行政のつながりのなかでの分析はない。そこで本稿では、宜珍の記した日記を分析の中心として、学問と行政のつながりを考えてみたい。

同時期の庄屋の書籍貸借に関する研究として、井上淳が三都から離れた村の事例として、伊予国伊予郡南黒田村庄屋鷺野南村の書籍を通じたネットワークの実態を説明している^⑤。鷺野の蔵書は、唐本を含む藩の儒者レベルで、近隣の庄屋や他藩士にも貸し出し、開かれた図書館としての性格を持った。また地元で入手不可能な書籍の取り寄せや、地域内の書籍販売の仲介を行っていたことをあきらかにしている。本稿における三都から遠い地域の庄屋宜珍を中心にした島原藩役人、渋江氏等の関係と比較していきたい。

主に利用する史料は、高浜村庄屋上田家文書である。上田家は庄屋を一代にわたって世襲し、近世を中心とした約七〇〇〇点の文書群を所蔵している^⑥。上田家は近世初頭に高浜に移り住み、代々庄屋を

勤め、六代伝五右衛門武弼が宝暦一二年（一七六二）に陶石採掘や窯業をはじめ、現在まで同地で経営が続いている。本稿が対象とする日記とは、七代源太夫宜珍が庄屋を勤めた寛政元年（一七八九）～文化一五年（一八一八）の三〇年間である。このうち寛政元、六、八、文化八年の欠年分を除く二六年分、寛政五年から文化一五年までの日記二一年分が『天草郡高浜村庄屋上田宜珍日記』二〇冊として刊行され、これまでに全文テキスト化しており、これを本稿の対象範囲とする。⁽⁷⁾

本稿では、庄屋をめぐる書籍の貸借と、その背景である学問と行政の関係について、国学や和歌を中心とする二点を分析する。まず1では、日記に記される本居宣長の書籍の貸借をとりあげ、天草詰島原藩役人、国学者長瀬真幸の指導、「古事記伝」の貸借に関与した地役人青木剛八、神職・学者洪江治部之助を事例に実態をみていく。2では、宜珍が入門した本居大平との和歌の交流、同門の信濃人三枝良古の旅と和歌、和歌に詠まれた行政実態（漂着唐船曳航と海老宇土争論の内済）から、宜珍の和歌への取り組みと行政との関連を考えたい。

1 上田宜珍の書籍の貸借

1-1 本居宣長書籍の貸借

島原藩役人大竹仁右衛門への貸与

日記に登場する本居宣長の書籍の貸借をまとめたものが表1である。書籍別に分けて一四件であるが、同じ記事に登場するものをまとめると一〇件、さらに3・4・9・10は、いずれも借用・返却の一括

なので八件となる。このうち宜珍が返却したものが1の一件、それ以外はすべて宜珍蔵書を貸し出し出している（8「到来」も返却とみなした）。記事のなかで一番回数が多いのは、島原藩士大竹仁右衛門であり、宣長の「真暦考」「玉銚百首」「玉あられ」、大平の「玉銚百首解」を借用・返却している。⁽⁸⁾大竹は日記によると享和二年（一八〇二）四月宗門改の廻村で高浜村を訪れ、文化元年二月までの約二年間天草詰であつたと思われる。これらの書籍は、享和三年七月の「玉銚百首解」のように宜珍が富岡へ出勤した際に渡したことが判明するもの以外は、飛脚等で送付されていると考えられる。

大竹は宣長の書籍以外にも、数多く宜珍から借用している。享和二年八月「四郎記一部、但四冊物」は島原・天草の乱、天草四郎に関するもの、享和三年二月七日「和名類聚集一鈔部」は辞書、四月五日には大竹から「天草高松名物角力付一枚」という名物角力の番付が到来した。また一月二五日、唐船御用のため崎津村に来ていた大竹のところへ、宜珍は御用のため訪問し、大江村江月院から受け取った「邪避論一冊」を進上している。

文化元年（一八〇四）二月二八日大竹は島原へ帰国とあり、「万葉集」「玉あられ」「海路記」「唐詩選石摺」「玉銚解」「六論エン義」「万斉文章」「高木先生同」「大成和尚文章」九点を返却し、「類纂」は進上したとある。「海路記」「六論衍義」以外は、和歌や漢詩、墨跡等と考えられる。「六論衍義」は、清世祖が民衆教化の目的で順治九年（一六五二）に頒布した六論を、琉球の程順則が解説し江戸中期に薩摩藩へて徳川吉宗に献上され、庶民教化の一環として享保七年（一七二二）

表1 上田宜珍日記の本居宣長書籍の貸借一覧

年代	西暦	月日	書名	刊行年	著者	貸出・借用先	身分	内容	日記本文
1	享和2年 1802	正月3日	古事紀伝五冊	寛政2	本居宣長	広瀬村堀田氏	庄屋	返却	一古事紀伝五冊、広瀬村堀田氏へ返却
2	享和3年 1803	閏正月21日	真暦考一冊 玉鉾百首一冊	安永5 天明7	本居宣長 本居宣長	大竹仁左衛門様	島原藩役人	返却	一真暦考一冊玉鉾百首一冊ノ二冊、大竹様へ御返
3	享和3年 1803	7月9日	玉鉾百首解二冊	寛政8	本居大平	大竹仁左衛門様	島原藩役人	上ル	一富岡出勤、船分、玉鉾百首解 二冊、大竹様 江上ル
4	文化元年 1804	2月28日	玉あられ一冊	寛政4	本居宣長	大竹仁左衛門様	島原藩役人	御返し	一今日大竹様嶋原江御帰候旨也 一万葉集 一部 一玉あられ 一冊 一海路記 一冊 一唐詩選石摺 一部 今富分 一玉鉾解 一冊 一六論エノ義 一冊 是ハ直ニ会所筆者甚平へ かし浦柳底庄や衆へ渡ヌ 一万斉文章 一篇 一高木先生同 一冊 一大成和尚文章 一篇 右之分御返し、受取候 外ニ類纂、一部ハ進上仕候
5	文化6年 1809	1月21日	玉鉾解一冊 美濃家つと一部 菅笠日記一部	寛政8 寛政3 明和9	本居大平 本居宣長 本居宣長		長崎唐通詞	相渡ヌ	一彭城藤四郎殿方美濃家つと一部、菅笠日記一部 并後水尾院様御製集一冊被申越候ニ付、右使片山 順右衛門と申仁江相渡ヌ
6	文化12年 1815	10月14日	国号考一冊		本居宣長	上野様	長崎代官元締	上ル	一国号考 一冊 一真暦考 一冊 一丸縁(線)表 一冊 ノ三冊 右上野・仲右衛門様へ御返
7	文化13年 1816	9月27日	真暦考一冊 古事記伝四冊一ニ 三四巻封	安永5 寛政2	本居宣長 本居宣長		牛深遠見番 青木剛八	貸	一古事記伝四冊一ニ巻封、剛八ハ皿山へ貸有之候 分今日おのふへ相渡ヌ
8	文化14年 1817	2月12日	玉くし氣一冊	天明6	本居宣長	今富	庄屋	到来	一玉くし氣一冊 今富へ到来 一家相大全三冊 今富へ返却
9	文化14年 1817	12月2日	大坂詞後歌、一部	寛政7	本居宣長	牛深社人方	社人	かし遣ヌ	一大坂詞後歌、牛深社人方へかし遣ヌ
10	文化15年 1818	4月7日	大坂詞後歌、一部	寛政7	本居宣長	牛深田代氏	社人	返却	礼右衛門方今富迄遣候由、今日到来請取

注：刊行年は「日本古典籍総合データベース」(国文学研究資料館)を参照。

室鳩巢「六論衍義大意」が出された。⁹⁾ 帰国後の同年六月晦日にも「広益三重韻二冊、詩法掌韻大成一」が大竹から会所詰筆者へ預けられている。宜珍と大竹との書籍を通じた交流は、「六論衍義」の庶民教化等、支配行政に関わるものも存在するが、宣長の書籍を中心とした国学、和歌等文芸中心の同好の士としての交流であったことがわかる。

藩役人への書籍を通じた交流

この傾向は大竹以外の藩士でも同様で、島原藩天草詰役人の三原正右衛門へ文化四年三月二十七日「万宝全書一部」(美術関連)、小川左十郎へ同年八月二十七日「近世崎人伝五冊老部」(伝記)、小川仁兵衛へ文化五年閏六月二日「大城先生墨跡一枚、明月来相照、相法骨格辨論大意式冊目老卷」(墨跡・相法)、曾田文左衛門へ文化九年二月四日「尚書古註、書経集註メ二部」(漢籍)等であった。また天草郡が文化一年長崎代官支配に変更した後も、天草詰元縮上野伸右衛門へ文化一年十一月二三日「史記一部箱入」(漢籍)、一二月二三日「武田三代軍記一部」(軍記物)、井原甚八へ文化一二年二月二日「舟路往返記老冊」(交通)と多様であり、ほぼ大竹と同様の傾向である。

これまで、宜珍著の天草の歴史書「天草備考」の島原藩・長崎代官役人への進上の分析から、そこには領民の築きあげてきた行政論理を敷衍するという意図があったとした。¹⁰⁾ しかし宜珍は、それとは別の学問・文芸による藩役人とのつながりもあり、複数の経路を持つことで、行政における庄屋の地位を高めていったといえる。

長瀬真幸と宣長書籍

日記に本居と登場するのは一ヶ所であり、文化三年正月二十七日、伊勢御師の手代横橋新平から、「本居先生御哥老枚御惠投有之候」と、本居宣長か大平の短冊と思われる和歌を贈られている。宜珍と宣長を結びつけるものとして、洪江宇内宛長瀬七郎平書状がある。¹¹⁾ 洪江宇内は、肥後国菊池郡の天地元水神社の神職で国学者、名を宇内、字は子方、松石ともいう。¹²⁾ 洪江紫陽に学び養子となり、私塾星聚堂で教育を行い、「菊池風土記」「儀礼凡例考纂」等を著した。洪江氏は配札のため九州各地を旅していた。宇内は宜珍の「天草備考」の序を記し、和歌・学問の師であり友といえる存在である。¹³⁾ 長瀬七郎平(一七六五〜一八三五)は、熊本藩士で国学者、名を真幸、号は田廬、居合や柔術の奥義を極めつつ有職故実を学び、寛政五年(一七九三)本居宣長入門、江戸では村田春海、加藤千蔭らと親交があった。¹⁴⁾ 万葉集を研究した「万葉集佳調」「万葉集佳調拾遺」等を著している。

この長瀬が宇内へ宛てた年未詳四月一九日の書状がつぎのものである。

(前略) 且又天草上田源作今土産之鉢式ツ德利老ツ差贈候由に付、御届被下忝収手仕候、右に付被仰下候趣き入御念候御儀重々辱奉存候、御蔭に而何今重宝之品入手不浅々々忝太慶仕候、右御礼宜被仰通可被下候詠草直出来候間、則進達仕候宜御伝達可被下候、余程面白御座候得共、是迄一向無師に而独学故歎、詞遣等未熟相見申候、是分出精有之候はば随分作者二成り可申候、猶御進め可

被遣候、又々詠草見せ被申候様被仰遣可被下候、私撰述之万葉佳調之風体被学候様被仰遣可被下候、てにをはの事不案内に相見申候、てにをは紐鏡詞の玉の緒玉あられなど申候本居翁之著述有之候、求候而相考稽古有之度、必後世の訓になつみ不被申様有之度、不審之儀者無遠慮書中に而尋遣候様被仰遣可被下候（後略）

長瀬は、まず上田源作（宜珍）からの土産の礼を述べ、宜珍の詠草はかなり興味深い、独学なので詞遣いが未熟であり、今後精進すればよい作者になると感想を記す。今後も詠草を見せてほしいが、長瀬の選ぶ万葉調の和歌を学ぶよう指示している。最後に、てにをはが問題なので、宣長の「てにをは紐鏡」「詞玉緒」「玉あられ」を入手して稽古するように指導している。この書状を紹介する角田政治は、年未詳とするが、上田日記によると、文化二年一月晦日、宇内が宜珍宅に立ち寄った際に、「熊本通り町裏田端、長瀬七郎平殿御方へ、愚詠七十二首添削ニ、渋江氏相頼遣ス」とある。長瀬の記事は、この文化二年がはじめてであり、住所を記していることから、先の書状もはじめてのもので翌三年に記されたと思われる。

長瀬が示した宣長の書籍、「てにをは紐鏡」は明和八年（一七七二）刊、てにをはの係り結びを一枚の図表にまとめたもの、「詞玉緒」は天明五年（一七八五）刊、「てにをは紐鏡」の証歌をあげ、説明を加えているもの、「玉あられ」は寛政四年刊、雅文を書くための言葉の正しい用法を説いたものである。⁽¹⁵⁾「詞玉緒」「玉あられ」は現在の上田家の書籍中に現存していることから、宜珍は長瀬の指示に従い入手

し学んでいたと考えられる。⁽¹⁶⁾

1-2 「古事記伝」の貸借 牛深地役人青木剛八の「古事記伝」

「古事記伝」に関する最初の記事は、享和二年の「古事記伝」五冊を、郡内広瀬村庄屋と考えられる堀田氏へ返却したものである。「古事記伝」は全四十四巻、附巻一、宣長は明和元年『古事記』の注釈を開始、寛政一〇年原稿が完成、寛政二年巻五まで、同九年に巻一七まで刊行、以降は文政五年（一八二二）に弟子たちが刊行した。⁽¹⁷⁾刊行時期から考えると、堀田氏返却の「古事記伝」は寛政二年刊最初の五冊であり、この時は宜珍蔵書ではなかった。

「古事記伝」に関するつぎの記事は、表1の7、文化一三年九月二七日「一古事記伝四冊二巻封、剛八が皿山へ貸有之候分今日おのふへ相渡ス」である。この剛八は、地役人牛深遠見番青木剛八（恵一郎、駿左衛門、徳輔）、宜珍の弟礼右衛門の長男にあたり甥である。⁽¹⁸⁾文化七年正月二九日に青木氏急病のため養子の話が出て、代官他調整を行い話がまとまり、二月八日宜珍が富岡役所へ「以書付申上候事」を提出した。「私甥駿平当午拾七才ニ罷成候処、此度牛深附遠見御番人青木要四郎方々養子仕度申談候二付、差遣候様可仕奉存候」と一七歳の駿平が青木要四郎の後を継いだ。青木の妻が宜珍妹おのふであり血縁関係があった。剛八は、文化一二年五月に病氣、文化一二年四月一八日病氣再発、「歩行も成兼甚致難儀」の状態で、二七日養生の為、高浜へ連れ帰り、皿山林太夫の空屋へ入った。その後七月八日同じ牛深

遠見番八田兵吾から剛八へ牛深へ帰るように書状が届いた。そして翌年の「古事記伝」の記事であり、これは剛八が病氣療養のため皿山に持参し、皿山の住人のいづれかに貸していた「古事記伝」と思われる。剛八はその後、文政元年八田兵吾が青木氏に復帰したため、八田徳輔となるが、翌年一〇月に二六歳の若さで死去した。

庄屋上田家から地役人青木家に養子に入り、若くして病氣になった剛八は、役人としての教養、または伯父宜珍の影響を受けての関心か、「古事記伝」を学んでいたと思われる。また高浜焼の陶工等、焼物関係に従事する住人の多い皿山に貸し出されていたということは、そこでもまた「古事記伝」を読む・読める人びとが存在したことがわかる。

肥後儒者洪江渚灘への貸し出し

この「古事記伝」は、肥後菊池の神職・学者である洪江宇内の三男治部之助も関心を持っていた。文政二年七月五日治部之助は宜珍へつぎの書状を送っている。⁽¹⁹⁾

頃日ハ御高詠奉願候処、早速御草稿被成下千万難有仕合、誠二年不存御高調奉感吟候儀ニ御座候、此間ハ三枝氏相見へ申候、(中略)、扱又御大切之御本拝見被仰付千万忝奉存候、以御蔭色々書一読仕得候言難尽奉存候、私も両三日中より須臾帰省仕候筈ニ御座候間、先尊書ハ奉完壁候、乍憚御落手被為成可被下候、尚又私も当月中ニハ無違、又々罷上り申候間、其時分ハ何とぞ、古事記伝神代卷之処計ニても、拝見被仰付被下候様、重畳奉願候儀ニ

御座候

この書状は年号はなく、後述する三枝良古が文政二年五月上田家を採訪しているので同年とした。まず宜珍の和歌の草稿に感動しており、その後宜珍所蔵の珍書拝見の礼を述べている。そして今回は「古事記伝神代卷」だけでも拝見したいと願っている。この「古事記伝」は宜珍蔵書となっている。治部之助は、儒者洪江渚灘(一七八八―一八四六)として文化一三年九月富岡下町の学寮で開塾した。これは天草詰役人上野伸右衛門の斡旋によって進められ、代官所役人や町役人等の子弟教育が行われた。⁽²⁰⁾ そのため富岡から近い宜珍宅へ出入りし珍書を読み、書状中にもしばらく菊池へ帰省するとある。父宇内と同じく学者であり、宜珍の和歌や蔵書に関心を持っている。ここでも宜珍の蔵書は同学の士に公開されていたことがわかる。

この開塾のため、文化一〇年長崎代官支配変更の際に、旅人取締が厳重となり中止された、水神社の配札が復活する。文政元年一〇月会所詰大庄屋からの触では、治部之助が「親跡式引譲ニ相成、郡中配札之儀、当春中御役所表江願立有之候処、御聞濟、則此節出郷有之」と、配札が再開されるとある。⁽²¹⁾ そして一〇月二九日には治部之助が高浜村に配札に訪れた。その際、昨夜から村内の勇吉宅へ泊っていた熊本本庄在宅人中小性下田熊之進も来訪している。下田は、治部之助の兄洪江安宅の舅であり、治部之助の添書を持参していた。学者であり神職である治部之助は、学問の能力で行政を動かし家職の配札を再開させることができた。

文政元年五月二〇日、宇内の長男安宅が上田家に宿泊し、昨年冬の菊池の火事について話をしている。そこには渋江家も類焼したが、大龍王宮と書物は瓦屋根なので無事であり、その際、安宅は大矢野、治部之助は富岡へ出ていたので、次男勝真と母親のみで何も取り出すことはできなかったとある。翌日安宅から「集古法書」という、本朝の古筆を石摺で堅折本にした書籍の価格情報を得ている。一部の代金は三五貫文で、一〇年以前熊本藩校時習館が買上げた際には二〇貫文に値下げしたという。宇内や治部之助と同様学者であった安宅も、宜珍に書籍情報をもたらしていることがわかる。

2 国学・和歌と村の行政

2-1 本居大平と国学のつながり

本居大平への入門と天草の門人
宜珍は、書籍の貸借からわかるように、本居宣長・大平の学問を書籍で学んでいた。直接教えを受け始めるのは庄屋退任後の文政二年、大平へ門人誓詞を提出している。⁽²²⁾ つぎの大平の書状は、入門後の状況について伝えたものである。⁽²³⁾

一筆致啓上候、以寒氣之節貴家御揃御安全に可被成御座珍重に奉
存候、随而愚老無恙致起居候、乍慮外御休意可被下候、然者貴君
義先達而足代権大夫ぬし取次を以て御入門之所、古学御執心にて
詠歌等御見せ甚致感賞候、付而者猶於天草同志之人々入門御取立

之段致大慶候、貴地者遠路の事にも候へば毎々御聞合に不及、以後入門之人者貴家迄申出候は、此方へ御申達にてよろしく御座候、猶委細足代氏へも引合置候間、左様御取計可被成候、依之如此御座候、猶期後喜之時候、恐々謹言

文政二年十一月十九日

大平

上田源大夫様

尚々此書状御披見候は、早々御返事待入候、其節又々御詠草も御見せ可被成候、猶かね、申入候貴詠御清書も早々御見せ可被成候、此度愚詠少々御めにかけて候、以上

まず宜珍の入門は、足代権大夫（弘訓）を取次に行われたことがわかる。足代弘訓（一七八四〜一八五六）は、代々伊勢外宮の禰宜であり、本居大平に国学を学び、京都・大坂・江戸で多くの文人と交わり、本居系の学者のなかで最も思想性が強く、時勢認識が高い人物であった。⁽²⁴⁾ つぎに天草の同志の入門に関しては、遠路であるので宜珍への申し出のみでよいとある。宜珍は、入門早々に天草における取次の役割を与えられたといえる。大平の天草の門人は、「藤垣内門人姓名」によると、宜珍以降、文政三年五月七日同じ高浜村八幡宮神主の宮口左馬輔、御領村大島郷小山熊三郎正彦、文政四年浦村医師池上謙朔軌達の三人が記される。⁽²⁵⁾ このほか『上田宜珍伝』では、福連木村尾上文治公雄、猪原勘兵衛敏真の二人が門人であり、いずれも大平の書状を請けて、宜珍が仲介して入門したとする。⁽²⁶⁾ この門人帳は、文政六年八月九日大平書状によると、「愚詠短冊七葉進上申候、外に社中短

冊有合申候分進上候、是は会席にて当座にかき候にてみだりがはしく御座候、又々か、せ候で上可申候、人々之姓名は門人帳御引合可被成候」とある。⁽²⁷⁾会席で詠んだ大平と社中の和歌を進上するので、姓名は門人帳で確認してほしいとする。門人帳の写しは、このような和歌の詠者を特定するための情報集でもあった。

和歌のやりとり

大平とは、和歌を中心とした師弟関係であり、書状にも「古学御執心にて詠歌等御見せ甚致感賞候」と、宜珍の和歌を賞賛している。また詠草だけではなく清書の歌集も見せてほしい、自分の和歌も紹介するとあり、弟子に対して積極的に指導を行っている。

文政七年三月二三日の大平書状では、「阿麻久佐志麻可我見（天草嶋鏡）」の序文（文政六年八月）の礼として、宜珍が「序文為御礼三百疋、蠟砂糖漬沓箱珍物之品」を贈っていた。⁽²⁸⁾この序については、大平撰『八十浦之玉集』に選ばれた和歌にも詠まれている。『八十浦之玉集』は、賀茂真淵及び門人、本居大平及び門人の詠歌等、復古派の和歌を編集し、文政五年大平の序等があり、同十二年に刊行している。⁽²⁹⁾『八十浦之玉集』で宜珍は「おのか書したる天草風土考の序文を師の書て給ひたることをよろこひて」と題して、「つたなくもあらはせる文見すてすて、はしかき書て給ふ嬉しき」はし書の光そひてそ後の世の、人もとりみんわかかける文」の二首を詠んだ。

つづいて大平書状には、「七十賀の歌社中とりあつめ、四月の船便に出し可申候」とあり、宜珍の七十賀の和歌を送るとある。「宜珍君

歌備忘帖」には、文政七年秋に大平から、「天草滋野宜珍翁七十の齢をことほきて」という和歌が存在する。⁽³⁰⁾そして文政六年九月「社中藤垣内」の案内に、「文政八年先生七十年賀に付、社中一統詠出仕候、其御地何れも賀詠御越可被下候」と、文政八年の大平の七十賀に対する祝歌の要請が来ている。文政一一年初秋には、大平から宜珍肖像画の讀として和歌が詠まれている。⁽³¹⁾宜珍と大平は師弟関係であったが、それ以上に相互に和歌を贈りあう同世代の意識もあつたと思われる。

本居清島と書籍収集

大平との国学、和歌を媒介としたつながりは、大平の次男で国学者の本居清島（一七八九〜一八二一）とも存在していた。「去年御入門にて」とあることから、入門の翌文政三年一月一九日の宜珍宛書状には、「老父へ御詠草御見せの節ちよと拝見いたし申候所、いろ、御おもしろきことどもにて御座候、年来御学びごみのおもふき相見え」とある。⁽³²⁾清島は、宜珍の詠草を父と一緒に見て感心している。尚々書にも「愚詠も少々御めにかげ度奉存候」とあるが、急便であるのと、日夜諸国に文通・返事を書いているので難しいと記す。息子清島も大平同様、和歌の添削と自作の手本の送付が基本であったことがわかる。また宜珍の書籍の収集に関するつぎの一文も記される。

一 過し年文化二二年頃歟、老父大平京都並いせへまゐり候節の日記二冊春のにしき・夏衣といふ御座候、諸方の人々に出会の事よりはじめ旅居のほどのことくはしくしるし御座候もの也、御

慰にも相成可申奉存候、右は二冊にて紙数百六七十枚も御座候、此方にて筆工に申付うつさせまゐらせ可申哉

大平が、文化一二年頃に記した京都・伊勢参りの日記「春の錦・夏衣」という書籍について、写本の斡旋をするというものである。清島は、両書の内容を簡潔に述べ、続けて合計枚数と筆工を使い書写してもよいと提案している。この二冊は上田家の書籍に現存しており、宜珍が入手した可能性は高く、このようなかたちで蔵書となる書籍を収集していた。⁽³³⁾ 師に入門するということは、師の著作写本や詠草等、直接的な情報を手にする機会となり、それが弟子宜珍の蔵書形成の一つの柱となっていた。

2-1 信濃人三枝良古の旅と和歌

三枝良古の滞在と序・墓碑銘

宜珍の同門の士のなかで、数多くの交流の記録が残るのが信濃人三枝良古である。最初の記事は文政元年七月一二日「信州筑摩郡古井村社家、大平大人門弟三枝中務廿六才、右国学修行薩州行之由、口ノ津夕鬼池へ舟揚、御領佐伊津本戸馬場町山口津留牛深へ相通り、当村へ舟今夕相見候」とある。三枝は、信濃の社家で大平の門人二六歳、国学修行のため薩摩に行く途中に宜珍の所へ立ち寄っている。九月三日「今日天神丸兮便船ニ而川内へ御越、七月十二日牛深兮御出候ニ付五十二日滞留之内、七日ハ不知火見ニ上津浦迄御越候分引、四十五日此方へ滞留ニ相成候」とある。三枝は、四五日間の長期滞在中に、「天

草風土考」「天草嶋鏡」に序を記す。「天草嶋鏡」の序によると「此ぬしの遠津祖のみましし国なればとて、其ちなみにつきて」とあり、三枝は宜珍の祖滋野氏と同じ信濃出身のため序を依頼されたとある。

また三枝は、文政元年八月に上田家初代の助右衛門正信の墓碑銘を作成した。⁽³⁴⁾ 墓碑銘には、滋野氏の発祥、初代が真田昌幸に仕え、紀伊九度山、大坂の陣に従い、その後高浜に移り庄屋になったことを記す。そして宜珍が子孫のために碑を建てるので、家の言い伝えをまとめて誌したとある。先祖の出身地の同門ならではの依頼といえる。宜珍がまとめた和歌集「島乃藻屑」には、「信濃国人三枝良古ぬし初めてとひ給ひし時」と題して、「とほつ親のすみし信濃の国人と、きけはゆかしくおもほゆるかも」と詠んでおり、信濃国人にゆかしさ、懐かしさを覚えている。⁽³⁵⁾ 続けて「しはらくととまり給ひて、大皇国の古事ともを五百くまや八百くまなく、導き教へ給ふま、」と題して、「いさなはれゆけはなほ更ひろけて、直き神世の道の行よさ」と詠んでいる。三枝の滞在期間に国学に関しても学んだことがわかる和歌である。

その後も三枝との交流は続き、文政三年九月高浜八幡神社の碑文を依頼している。⁽³⁶⁾ これも「島乃藻屑」に、「文政三とせといふ年の文月の末に、この鳩のみねなる廣幡の八幡の宮のかたはらに、信濃国三枝良古主にか、しめて立し石文、並宜珍よみし歌三首」として引用されている。三枝の碑文は「肥後国天草郡高濱邑鎮座八幡大神乃大宮処誌文」と題し、前半は八幡宮の由来と変遷、後半は特に文化一一年火災からの復興等を詳細に記す。変遷のなかで「小西行長刀云者、此所乎

領岐計留頃、最毛賤吉南蛮登云、戎国能妖言爾波伽良連」と、小西行長のキリスト教布教により、神社が破壊されたとある。「戎国能妖言」と国学思想に影響された言葉もあり、同じ大平門下として、宜珍の思想の一端を知る上で興味深い。

三枝の旅と和歌

宜珍は、三枝の薩摩行きに関心を持っており、「三枝之大人日記抜書」が現存する。⁽³⁷⁾これは外題によると「霧島能記、附三枝日記抜書」とあり、文政一一年弥生に写した著者不詳「霧島能記」の附属である。この「三枝之大人日記抜書」は、日向の高千穂串日峯からはじまり、薩摩の愛御陵（新田神社）、海門獄、神武降誕地等、記紀由来の地に関する紀行文、地誌的な内容である。

それは宜珍の和歌の「備忘帖」である「宜珍君歌備忘帖」の内容からもいえる。「備忘帖」の最初には、文政元年七月三枝の出身・名前・年齢に続き、「このぬしよりききしこととしるしぬ」として、大部分が三枝の各地で詠んだ和歌や聞いた内容である。三枝は文政二年五月上田家を再訪し、さきほどの薩摩行きの際のものと思われる、「さつま新田宮にて」「さくら島を」「青島にて」「神武の宮にて」の和歌を宜珍が記している。また薩摩行きのため高浜から船に乗り沖合の大ヶ瀬を進んでいた際に、この付近にあだし船が沈んでいる話を聞いたことも記す。三枝が各地を訪れそこで詠んだ和歌、迎えた人が詠んだはなむけの和歌が数多く収録され、敦賀・伊勢・京都・大坂・因幡かろの浦・備後長井・豊前みのしま・豊後鶴見・日田・肥前田代・筑後

舟引湯・長崎等、西日本一帯に広がっている。信濃を出て各地を旅して、天草をへて薩摩に向かったと考えられる。

島原では「島原塚本勝助政直へ玉銚百首につけておくる長歌」を詠んでいる。この塚本は、文化五年四月高浜村で測量をおこない、文政六年に高浜他、崎津・富岡・牛深の主要港の絵図を作成した塚本政直である。⁽³⁹⁾この調査は、文化二年の長崎へのレザノフ来航等の異国船対策の一環であった。三枝の贈った「玉銚百首」は、本居宣長が天明六年（一七八六）に記した、神国としての日本の成立を和歌で表わしたものである。塚本は絵図の詞書にも「夫高濱者雖海嶋之濱非港津也、而其濱也者左右絶壁中間白洲如蛇横而抱河口、林松如鱗茂而防風波、雖逆浪河内必安可以容中小船数十艘、其便尤大也、」と記す。高浜は港ではないが、中小の船がたくさん停泊するにはよいと述べる。⁽⁴⁰⁾その後、「如此之濱者異邦之船舶漂流、或寇賊渡来必寄」と、異国船の漂流や賊徒襲来を警告している。いずれも和文ではなく漢文調の文章で記す。これは何らかの学問に通じていたことを示し、「玉銚百首」を受け取る等、国学への関心も高いといえる。このように宜珍、三枝、塚本の三者が学問によってつながっていた。宜珍は、若い三枝の和歌や国学の能力を高く評価し、全国を旅した見聞や各地の同門の士の情報を得ようとしていたことがうかがえる。

また三枝を介した各地の歌人との交流が和歌に残っており、「島乃藻屑」には、三枝の勧めで和歌を詠み始めた日向国児湯郡妻町児玉二右衛門祐庸に関するものがある。⁽⁴¹⁾児玉は六〇歳過ぎ、三枝より「よみ出なは天草の宜珍へやりてよ」と言われ、「をしへおかれしま、

えらひくれよと、二十まりのよみ歌見せられける」と、宜珍に和歌の指導を請うている。遠国から旅をしている三枝は、日向の近隣であり同世代の宜珍を、和歌の指導者として紹介していることがわかる。宜珍と三枝は、お互いの和歌・学問の能力を評価し、各地の同門・同好の人びとをつなげる結節点の役割を持っていたといえる。

2-3 和歌にみる村の行政―唐船漂流の曳航と海老宇土一件

宜珍が学び詠んだ和歌を読みすすめていくと、庄屋として携わった村の行政に関するものが登場する。「島乃藻屑」には、①唐船漂流の曳航と②海老宇土一件の二件が収録される。⁽⁴²⁾

①唐船漂流の曳航

まず唐船が漂流した際の長崎への曳航についての詞書と和歌である。

こたひ崎津のみなとにた、よひ来りし唐舟を長崎の津へあまた
の小ふねもてひき行ん事の仰をかうふり奉りてみな、出たつ
とき

つとめよや今よりか、るからふねをひかんだめしのはしめと思ひ
て

浦安の国へ引行から舟は心にか、るうきなみあらめや

浪風のまかはゆ、しもかしこしもわたつみの神いのり袴れよ

また

から舟やからき塩ちをわたるその心ち、わのなたのおもひは

ことさへくからの大舟ひきわたすことはかるにもいふ言そおほき

から舟を引へき小舟のうち、十艘おくれでありしか、十二月朔日崎津のみなとに乗ゆかんとせしに、西の空俄にかきくもり、風波はけしく立て、荒尾山の磯辺より、やうやくに逃かへるもあれと、今二艘行方しれぬは、おとろきあわて、その舟人のうからやからなきかなしみ、里人も立騒ぎ、磯山つたひあまた人をはせつかはしけるに、六左衛門ふねは大そうつにつかれ来りしを、人々つとひ来てくかに引よせ、舟子みなたすかり、舟もさはりなく、又福二郎舟は大江浦の池尻といふところに漂ひ行て、これもたすかりぬと、人々馳せかへり告ければ、嬉しくとりあへす、

から舟を引そのつらにおくれぬし小舟はからきめをもみしかな
ふきかはる風もあら尾の磯なみは大そうつならむにたすかりしと
や

かたつみの神のさきはひなくはいかてこの浪風のまかのかれまし
かしこみて今よりいよ、わたつみの御神をた、にいのれふね、

前半は崎津に漂着した唐船を、長崎へ曳航するため、高浜を出発した際の和歌である。最初の一首は、今から取りかかる唐船曳航を「ためしのはしめ」と考えて勤めていくと解釈できる。後半は曳航船の内一〇艘が遅れて、一二月朔日に崎津を目指していた。しかし天候の急変で二艘が一時遭難したが、無事に戻ってきて喜んだという内容であ

る。

日記には該当する月日で、唐船漂着の曳航記事はないが、文化七年一二月漂着唐船が七日、一三日と計二艘連続して崎津村に入港し、高浜村が直接代官の指示を受け曳航した事例がある。⁽⁴³⁾それ以前は舸子役の多い崎津が主導し、高浜、大江、今富村の挽船を雇用していたが、この時は今富村と出入を起こし協力を得ることができなかった。⁽⁴⁴⁾崎津にかわって高浜は明日中に四〇艘準備可能か代官から打診を受け、明日までに三〇艘と小船一〇艘可能と答え、最終的に三六艘を準備した。この一件で崎津の地位が低下し、高浜の漁民の存在が注目された。⁽⁴⁵⁾この和歌は月日が違い、遭難の件も記録にないことから、別件の唐船曳航とも考えられる。ただ唐船曳航の「ためしのはしめ」と意気込んでいることから、転機となった記念すべき文化七年一二月の件と別件を組み合わせ創作し、祝い歌となったのではないだろうか。

②海老宇土一件

つぎは宜珍が文化一三年四〜五月に対応した海老宇土一件に関する詞書と和歌である。

天草のあかた、海老の宇土なる野山、年久しくこち、のむら、とあらそひけるに、こたひあかたのつかさ高木の君より、福富ぬしをして、そのあらそひをことわり、民くさのなりはひをも安からしめんとて、野てふ野の末、山てふ山の奥、河の五百くまや八百くま、ても、卯月の初より五月の半まで、日毎に

はかりみ給ふ、みいさをの程ハいふもさらなり、わきてこのさと人の、末なかくみ恵をか、ふり奉る事をあふきて

君か手に分れハやかて草も木もさらに言やめなひくかしこさ
さかえたる高木のかけにすむ民の心にあふく風の涼しさ

この時仰をか、ふりて宜珍も福富ぬしにしたかひひける程五月五日になりけるそのあした

をりにあふめくみの露のあやめ草かをるもふかき山のおくまで

前半の詞書では、郡内榎宇土村海老宇土が長年他村と争論を起こしており、今回長崎の高木代官が手代福富を解決のために派遣したとある。これは日記文化一三年五月一二日につきのようにまとめている。

一拙者御用相済帰宅、三拾八日相掛候

但四月五日御出役様方と一同早浦へ参り三泊り、同八日夜牛深

泊り、同九日夜小宮地泊り、四月十日榎宇土泊り、同十一日

今五月十日迄三拾日海老宇土へ滞留、御本陣二而御賄請ケ、

同所測量いたし入会野山一件内済取斗書付等御役所へ持参、

御用相済候二付罷帰候

一此度段々太儀致、殊海老宇土一件数年来及出入候儀、内済取斗

手柄之段長崎表へ御届可申上之段被仰渡、御称美被仰聞候

一海老宇土入会山一件訴訟、町山口村外六ヶ村相手海老宇土双方

御吟味御座候へ共何分不相分候二付、此度上野伸右衛門様御出

役御取斗被遊候筈之処御差合二付、長崎今御代り御手代福富六

郎太様御越被遊、同所田畑畝押シ被遊、惣廻り境御改、道川等
測量、野山大繩反別御積有之候、委敷ハ別記ニ有之候

宜珍はこの数年來続く海老宇土一件の内済に計三七日間携わり、入
会野山の測量に従事した。そのときの代官側の担当役人が、天草詰上
野仲右衛門に代わって派遣された手代福富六郎太であった。詞書にあ
る野の末、山の奥、曲がりくねった川を「日毎にはかりみ給ふ」は測
量を表している。そしてその功績とともに、今後恵みを受ける村人に
対して、高木代官の指示によって納得した草木（村人）が内済に及ん
だ賢さ、ますます榮える高木代官（山の高木とかけている）の治世に
よって安心に暮らせると詠んでいる。後半の和歌も「めくみの露」を
代官の行政にかけ、深き山奥の海老宇土まで及ぶという意味である。
いずれも高木代官、福富の業績を称賛しつつ、その地方側の担当者と
して携わった宜珍自身の自負もこめられた和歌といえる。

①唐船漂流の曳航と②海老宇土一件のいずれも、宜珍の行政能力を
表す内容であり、それらを和歌に詠むことで、記録・記念すべき地域
情報として後世に残していく意志が働いていたと考えられる。

長崎代官手代からの写本

この時に宜珍が福富から借りて書写された書籍が二点存在する。ま
ず「忘備」、書名からは宜珍のメモ程度のものに思えるが、幕府の政
策に関する内容である。⁽⁴⁶⁾ 書写の最後に「此一冊文化一三子年四月海
老宇土御見分之砌、御出役福富六郎太様御内々ニ為写被下候也」と

ある。海老宇土の見分中に、長崎から出役した福富より内々に写させ
てもらったと理解できる。本書の最初には、「質地取捌一件」とあり、
寛保元年（一七四二）に「神尾若狭守好依而船橋安大夫仕立之、本多
伊予守殿江認上」げたものである。神尾若狭守は勘定奉行の神尾春央、
本多伊予守は若年寄の本多忠統であり、いずれも享保改革を推進した
幕閣であった。関東の地名が多く、実際に起こった質地に関する行政
処理について記している。末尾には、宜珍が写した後に記したと思わ
れる「質入候者小作致候ヲ直小作ト云」等用語を中心に要点をまとめ
ている。

つぎの「訴類聞書」⁽⁴⁷⁾は、「関八州御料私領分訴出候出入之事」から「敵
敷吟味もの取斗之事」まで一五〇箇条にわたり、代官や勘定奉行の裁
許の文言がある。さきほどの「忘備」と同じく、幕府領代官所の業務
に関する手引書と考えられる。宜珍は、長崎代官の手代福富と、一ヶ
月間にわたり海老宇土一件訴訟の解決に尽力し、福富の信頼を得て、
代官所業務の手引書の内々の書写に成功したといえる。このような代
官所側の情報を収集していくことも、村の地域情報の蓄積には重要な
作業である。宜珍が編纂した「天草嶋鏡」にも、領主側から入手した
情報が記載されている。⁽⁴⁸⁾ 宜珍は役所・代官所の依頼業務を積極的
に取り組み、経験と情報の両方を蓄積していった。

おわりに

以上、本稿では、高浜村庄屋上田宜珍をめぐる書籍の貸借と、その背景である学問について、国学や和歌を中心に考察し、学問が庄屋宜珍・行政とどのように関連するのか分析した。まず1では、宜珍の庄屋日記に記される本居宣長の書籍の貸借を対象とした。領主層である天草詰島原藩役人大竹仁右衛門とは、宣長の書籍を中心とした国学、和歌等学問中心の同好の士としての交流があった。他の藩士も同様に学問・文芸によるつながりがあり、行政のみならず複数の経路を持つことで、情報の精度や庄屋としての地位を高めていたといえる。宜珍が宣長から直接学んだ記録はないが、洪江宇内を通じて宣長の門人長瀬真幸から和歌の指導を受けた。長瀬は、宜珍のてにをはの問題に対して、宣長書籍で学ぶよう指示している。

また「古事記伝」に絞ってみていくと、宜珍の親類で地役人青木剛八が病氣療養中に「古事記伝」を学んでいた。それは高浜焼の陶工等へ貸し出されていた形跡もあり、宜珍周辺にも「古事記伝」を読む・読める人びとが存在した。肥後菊池の神職・学者洪江治部之助は、宜珍と親密に交流していた親宇内に続いて、宜珍の和歌や蔵書に関心をもち、「古事記伝」や珍書の閲覧を望んでいた。宜珍の蔵書は同学・同好の士に公開されていた。治部之助の兄安宅も学者であり、宜珍に書籍情報をもたらしている。洪江親子との交流は、家職の配札授受の他、書籍の貸借、情報提供等も含めて幅広いものであった。

2では、まず宜珍が庄屋退任後の文政二年に入門した、本居大平と

の和歌の交流をみた。宜珍は入門直後、和歌・人物が評価され、天草における入門希望者の取次のな役割を与えられた。宜珍と大平は師弟関係にあったが、それ以上に七十賀等相互に和歌を贈りあう同世代の意識もあったと思われる。また同時期に出会った大平門の三枝良古の和歌・旅への関心も高く、全国を旅した見聞や各地の同門の士の情報を得ようとしていた。そして宜珍の先祖と同じ信濃出身の三枝には、「天草風土考」の序、上田家初代助右衛門正信の墓碑銘、高浜八幡神社碑文を依頼している。若い三枝の和歌や国学の能力を高く評価するとともに、同郷の縁を強調している。

つぎに和歌に詠まれた行政（漂着唐船曳航と海老宇土争論の内済）から、宜珍の和歌への取り組みと行政との関連をみた。歌集「島乃藻屑」には、文化期の漂着唐船の曳航が詠まれているが、「ためしのはしめ」と意気込んでいる。これはそれまで崎津村に従属していた高浜村の地位が転換した記念の祝い歌であった。また海老宇土争論では、長崎代官・手代福富の業績を称賛しつつ、地方側の担当者として携わった宜珍自身の自負もこめられた和歌であった。そして福富の信頼を得て、代官所業務の手引書の書写を行ない、代官所側の情報を収集し、地域情報を蓄積していった。師である本居大平の書籍も写本によって収集したが、行政の情報も同じ写本の形式によって収集し蔵書を形成していった。

このように和歌や国学は庄屋の個人的な学問への関心でもあるが、領主層である藩士等との共通認識の形成、村の行政にも必要な知識であった。その主たる方法の一つが書籍を通じた交流であり、そこで学

問と村の行政が接続していたといえる。

追記 史料の閲覧に際して上田陶石合資会社、田中光徳氏には御高配を賜った。また古典籍に関して米谷隆史氏に貴重な情報をご教示いただいた。ここに記して感謝申し上げたい。なお本稿は二〇一三～二〇一五年度、JSPS KAKENHI2370785（基盤研究（C））「近世村落における地域情報の調査・記録に関する比較研究」（研究代表者東昇）の研究成果の一部である。

（二〇一五年九月三十日受理）

（ひがし のぼる 文学部准教授）

- (1) 東昇「近世村落行政における地域情報と庄屋日記―肥後国天草郡高浜村上田家を事例に―」松原弘宣・水本邦彦編『日本史における情報伝達』創風社出版、二〇一二年、一八八～二三三頁、同「近世後期庄屋日記にみる地域情報の収集・伝達―肥後国天草郡上田家と船頭情報―」『京都府立大学学術報告』人文六五、二〇一三年、一〇五～一二四頁。
- (2) 東昇「地域情報の集成と知識の伝播―書籍による人のつながり―」『近世の村と地域情報』吉川弘文館、二〇一六年刊行予定。
- (3) 角田政治『上田宜珍伝 附上田家代々の略記』（『上田宜珍伝』と略す）一九四〇年、五六～九〇、一四九～一五二、附録六一～一〇八頁。

- (4) 上妻博之「長瀬真幸伝」『日本談義』一二五～一三二、一九六一年、同「本居宣長先生と門人」『日本談義』五・二二～二四、一九五～一九五二年、いずれも上妻博之著、川平敏文編『肥後の和学者』熊本文化研究叢書六、熊本県立大学文学部日本語日本文学研究室、二〇〇九年を参照した。
- (5) 井上淳「近世後期における書籍流通―大坂本屋と伊予―」（『地方史研究協議会編』歴史に見る四国』雄山閣、二〇〇八年、八五～一〇頁）。
- (6) 上田家文書は、庄屋家の子孫にあたる上田陶石合資会社（熊本県天草市）が所蔵する。なお文書目録は天草町教育委員会編『天草町上田家文書目録』（一九九六年）がある。以下上田家文書を引用する場合には文書番号を記す。
- (7) 『天草郡高浜村庄屋 上田宜珍日記』寛政五～文化一五年、全二〇巻、天草町教育委員会、一九八五～一九九八年。なお日記の引用部分の出典については、各年の該当月日を参照いただきたい。
- (8) 米谷隆史作成「上田家蔵古典籍仮目録」二〇一二年によると、二〇三「真暦考」、六〇五「玉銚百首」、三三三「玉あられ」が現存。
- (9) 石川松太郎「六論衍義大意」『国史大辞典』吉川弘文館、ジャパンナレッジ版（以下同）。
- (10) 前掲東昇「地域情報の集成と知識の伝播―書籍による人のつながり」。
- (11) 『上田宜珍伝』、六〇～六一頁。
- (12) 『三百藩家臣人名事典』七、新人物往来社、一九八九年、四四五頁。

- (13) 前掲東昇「地域情報の集成と知識の伝播―書籍による人のつながり」。
- (14) 『三百藩家臣人名事典』七、四五四～四五五頁、『日本国語大辞典』小学館、ジャパンナレッジ版。
- (15) 古田東朔「詞玉緒」『国史大辞典』、『デジタル大辞泉』小学館、ジャパンナレッジ版。
- (16) 「上田家蔵古典籍仮目録」によると、三六九「詞玉緒」、三三「玉あられ」が現存。
- (17) 大野晋「古事記伝」『国史大辞典』。
- (18) 松田唯雄『天草近代年譜』、みくに社、一九四七年、七一九・七二一頁。
- (19) 上田家文書一六一―二二六。
- (20) 『天草近代年譜』、三三一頁、『菊池市史』下、一九八六年、二九五～二九八頁によると、治部之助は文政三年に隈府へ帰っている。
- (21) 本渡市教育委員会『天領天草大庄屋木山家文書御用触写帳』三、一九九八年、三二頁。
- (22) 『上田宜珍伝』、六六頁。
- (23) 『上田宜珍伝』、一五五頁。
- (24) 伊東多三郎「足代弘訓」『国史大辞典』。
- (25) 「藤恒内文集、門人姓名」、「上田家蔵古典籍仮目録」一七二。
- (26) 『上田宜珍伝』、一四九頁。
- (27) 『上田宜珍伝』、一五四～一五五頁。
- (28) 『上田宜珍伝』、一五一頁。
- (29) 『上田宜珍伝』、六八～六九頁。
- (30) 上田家文書一六一―二一五。
- (31) 『上田宜珍伝』、口絵写真。
- (32) 『上田宜珍伝』、一五六頁。
- (33) 「上田家蔵古典籍仮目録」によると、二三「春の錦」、七七八「夏衣」が現存。
- (34) 『上田宜珍伝』、一〇～一一頁。
- (35) 『上田宜珍伝』、九七～九八頁。
- (36) 『上田宜珍伝』、八二頁。
- (37) 「上田家蔵古典籍仮目録」一一九。
- (38) 上田家文書一六一―二一五。
- (39) 東昇「近世肥後国天草郡高浜村における漁民と村政」『京都府立大学学術報告』人文六二、二〇一〇年、一三三～一三五頁。
- (40) 「檜垣文庫」二二―八―一、九州大学附属図書館所蔵。
- (41) 『上田宜珍伝』、八三頁。
- (42) 『上田宜珍伝』「島乃藻屑」、七九～八一頁。
- (43) 前掲東昇「近世肥後国天草郡高浜村における漁民と村政」一三五頁。
- (44) 平田正範『天草かくれキリシタン宗門心得違い始末』浜崎献作編、サンタ・マリア館、二〇〇一年、二一―四頁。
- (45) 前掲東昇「近世肥後国天草郡高浜村における漁民と村政」一三五頁。
- (46) 上田家文書三一―一四五。
- (47) 上田家文書別置分二四。
- (48) 前掲東昇「地域情報の集成と知識の伝播―書籍による人のつながり」。